

<研究報告>

「臨床看護実践を語る会」における参加者評価と今後の課題

杉田久子^{*1}、唐津ふさ^{*2}、西村歌織^{*2}、福井純子^{*1}

抄録：

【目的】本調査の目的は、「新人看護師の知の構築プロセスの可視化とキャリア形成評価ツールの開発」の研究過程において、新人看護師から3年目看護師までの3年間に継続開催した「臨床看護実践を語る会」の参加者評価を得ることである。

【方法】北海道内2病院において、「臨床看護実践を語る会」参加者を対象に、自記式アンケート調査を実施した。得られた回答を施設毎に集計し統計学的および質的に分析した。

【結果】調査の対象者37名中、計13名から回答を得た（回収率35.1%）。A病院の回答者は、3年間ほぼ毎回参加しており、B病院は、年1回程度の参加をした者からの回答であった。参加の動機は「他病棟の同期と話せる」が最も多かった。参加後は、「他人の考えから学ぶ」、「定期的な振り返り」が得られ、7割以上が満足感を得たと回答した。不参加の理由は、業務や休日で都合がつかないことが半数を占めていた。運営方法は、概ね適切で好評価が得られ、中堅看護師（5～10年）においても相応しく、企画があれば今後も参加したいとの回答が多かった。

【考察】参加者は、「臨床看護実践を語る会」で自分の体験を語り、他者の体験を聴くことで、共感が得られ満足感を示した。今後の課題は、企画としてのテーマ設定の吟味および自由度を保証した参加者確保の運営方法の検討である。また、対象を中堅および熟練看護師にも拡大していく必要性が示唆された。

キーワード：臨床看護実践、新人看護師、継続教育

I. はじめに

医療の高度化・専門分化に伴うチーム医療の時代を迎え、社会の多様なニーズに応えた活動に貢献できる人材育成が重要視されている。そのため、看護基礎教育および看護実践現場の職業教育におけるキャリア形成支援の基礎資料を得ることを目指し、新人看護師から3年目看護師までの知の構築プロセスを明らかにすること、およびキャリア形成のための自己評価ツールの要素を抽出し試案作成することに取り組んだ（「新人看護師の知の構築プロセスの可視化とキャリア形成評価ツールの開発」（平成25～27年度 JSPS科研費JP 25463308））。

本研究は、新人看護師が臨床経験を通して成長するにつれて、どのように看護実践を意味づけし、知識と「知

（Knowing）」を獲得しているのかについて可視化するために、「臨床看護実践を語る会」を開催し、実践共同体として共有化を図り、ディスカッションの場を通して、個人知の掘り起こしを期待するものである。

そこで本調査では、新人看護師から3年目看護師までの3年間に継続開催した「臨床看護実践を語る会」の参加者から企画運営の評価を得ることで、今後の研修プログラムのあり方や改善すべき課題について検討することを目的とした。

なお、「臨床看護実践を語る会」では、語りのテーマを事前に提示し、テーマに関する事実関係や場面を思い起こしてもらい、その内容を基にグループディスカッションを行った。グループには、看護教育経験のあるファシリテーターを1名程度配置し、思考過程の理解を促し、仲間との語り合いから新たな理解を導くように行った。1回につき60分程度、年に2～3回程度実施した。

* 1 看護福祉学部看護学科実践基礎看護学講座

* 2 看護福祉学部看護学科成人看護学講座

Ⅱ. 調査方法

自記式質問紙によるアンケート調査を実施した。各施設で開催される「臨床看護実践を語る会」最終回終了後に配付し、郵送あるいは回収箱への投函をもって調査の同意とみなした。

1. 対象者

北海道内の地域中核病院 2 施設（A病院450床、B病院630床）において、研究者主催の「臨床看護実践を語る会」の参加者（参加の意思表示をした者を含む）。

2. 調査期間

A病院は平成27年2月、B病院は平成27年9月に実施した。

3. 調査内容

「臨床看護実践を語る会」の参加度、開催頻度、時間設定、テーマ設定、参加態度、ファシリテーターへの意見、語る会への要望、継続性などの定性的意見を含む20項目による記述式アンケートを実施した。

4. 分析方法

質問項目ごとの単純集計を行った。自由記載は項目ごとに定性的に意見集約し、整理した。

5. 倫理的配慮

調査に先立ち、北海道医療大学看護福祉学研究科倫理委員会の承認（14N037036）を受けて実施した。

調査の遂行にあたり、「臨床看護実践を語る会」終了後に調査協力依頼を行い、依頼文と調査票を配付した。依頼文には、調査の目的と結果の活用方法について、調査の自由参加、プライバシーの保護、データの保管方法、調査票の返送をもって調査の承諾を得ることを明記した。なお、当日不参加の調査対象者には、郵送により依頼を行った。「臨床看護実践を語る会」において調査対象者とは関係性ができているため、依頼にあたって強制力が働かぬように配慮し、調査票の回収は郵送あるいは回収箱への投函とした。

Ⅲ. 結果

アンケート調査総対象者37名中、回答者13名（回収率35.1%）であった。内訳として、A病院の調査対象者4名中3名（回収率75.0%）、B病院の調査対象者33名中10名（回収率30.10%）からの回答を得た。

1. 調査対象者の背景

A病院の調査対象者（3年間継続参加者）4名は、全員3年目看護師であった。全員が看護専門学校卒者であった。B病院の調査対象者33名は、調査実施時点で3年目看護師25名（「臨床看護実践を語る会」の参加意思表示をしたが、不参加であった者5名を含む）、2年目看護師8名であった。不参加者5名を除く28名は、看護系大学卒者が23名、看護短大卒者が1名、看護専門学校卒者が3名、看護高等学校（5年一貫校）卒者が1名であった。看護系大学卒者23名は、看護師・保健師免許取得者であり、そのうち1名は看護師・保健師・助産師免許取得者であった。

2. 「臨床看護実践を語る会」への参加状況について

1) 「臨床看護実践を語る会」への参加頻度

A病院の回答者は、3年間の「臨床看護実践を語る会」開催期間中にはほぼ継続して毎回参加しており、B病院は、年1回程度の参加をした者からの回答であった（表1、図1参照）。

表1 「臨床看護実践を語る会」参加頻度 n=13

	ほぼ毎回参加	年に1回程度 (半分くらい) 参加	たまに (1～2回) 参加	参加してない
A病院	3 100%	0 0%	0 0%	0 0%
B病院	1 10%	8 80%	1 10%	0 0%
合計	4 30.76%	8 61.54%	1 7.69%	0 0%

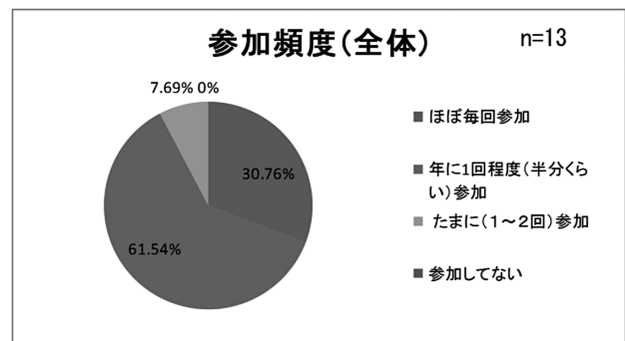


図1 「臨床看護実践を語る会」の参加頻度

また、参加できなかった理由には、全体で業務や休日都合がつかないことによるもので半数を占めていた(53.85%)。その他の回答(38.46%)で理由の記載があったのは、「今回が初めて」、「行きたいと思わなかった」があった（図2参照）。

表2 「臨床看護実践を語る会」参加の動機づけ（複数回答）

	テーマに興味がある		同期だけで話せる		他病棟の同期と話せる		上司・先輩に勧められた		研究に興味がある		院内研修と違い自由に話せる		その他	
A病院	0	0 %	2	66.67%	3	100%	0	0 %	0	0 %	2	66.67%	1	33.33%
B病院	0	0 %	2	20%	6	60%	8	80%	0	0 %	2	20%	1	10%
合計	0	0 %	4	30.77%	9	69.23%	8	61.54%	0	0 %	4	30.77%	2	15.38%

表3 「臨床看護実践を語る会」に参加して得られるもの（複数回答）

	テーマを考える	定期的な振り返り	他人の考えから学ぶ	課題なし負担なしで楽しい	その他
A病院	133.33%	3100%	3100%	133.33%	00%
B病院	00%	550%	990%	110%	110%
合計	17.69%	861.54%	1292.31%	215.38%	17.69%

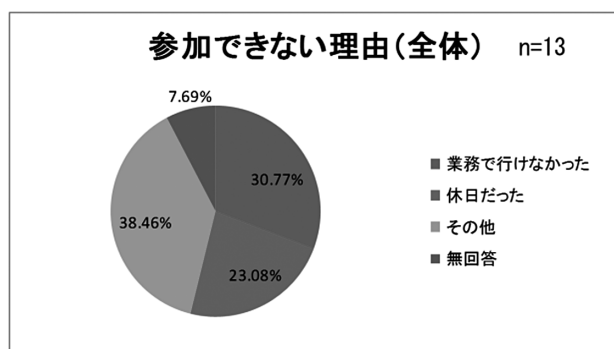


図2 「臨床看護実践を語る会」の不参加理由

2) 「臨床看護実践を語る会」への参加の動機

「臨床看護実践を語る会」参加の動機（複数回答）には、「他病棟の同期と話せる」が最も多く（69.23%）、次いで、「上司・先輩に勧められた」であった（61.54%）。

「同期だけで話せる」（30.77%）や「院内研修と違い自由に話せる」（30.77%）など、語りやすさが動機づけとなっていた。一方で「（語りの）テーマに興味がある」や「研究に興味がある」の回答は、A病院、B病院とも0名であった。その他記載内容では、「普段なかなか聞けない同期の“看護”について聞ける貴重な機会だと感じたため」「自分の看護観の参考になる」があった（表2参照）。

3) 「臨床看護実践を語る会」への参加満足度

「臨床看護実践を語る会」に参加して得られるもの（複数回答）には、回答者の殆どが「他人の考えから学ぶことがある」（92.31%）と回答していた。また、自分自身にとっても「定期的な振り返りとなる」（61.54%）と回答していた（表3参照）。

「臨床看護実践を語る会」に参加後は、7割以上が満足であると回答していた（76.93%）。その理由の自由記載では、「他病棟の同期の体験を共有できた」、「他病棟

の同期の話が聞けて興味深く刺激になった」、「人に話すことで改めて自分の成長や自分の看護観を実感できた」、「自分の考えを言葉に出来る機会になった」、「振り返る機会となった」との意見があった（図3参照）。

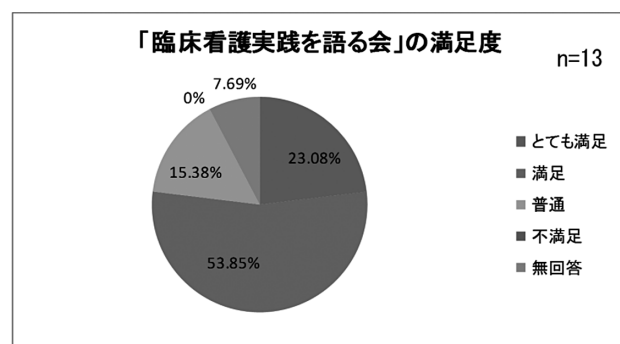


図3 「臨床看護実践を語る会」の満足度

3. 「臨床看護実践を語る会」の運営実施について

1) 「臨床看護実践を語る会」の開催について

「臨床看護実践を語る会」の開催時期については、ほぼ全員が満足～普通と回答され、不満足と答えた者はなかった。開催時間については、A病院では全員が普通という均一の回答であったが、B病院では、おおむね普通と回答されているものの、「早い」（15.38%）あるいは「遅い」（7.69%）という回答も認められた。年間あたりの開催回数については、多くもなく少なくもなく普通と回答した者が殆どであった（84.62%）。3年間全体の開催回数についても、同様に普通と回答する者が殆どであった（84.62%）。

2) 「臨床看護実践を語る会」の運営について

グループディスカッションの実施時間（約60分）は、ほぼ全員が普通と回答した（92.31%）。個人インタビューの実施時間についても同様に、ほぼ全員が普通と回答した（92.31%）。

また研究者が行ったファシリテーション（語りの促し）については、A病院、B病院とも満足であると回答した者が殆どであった（92.31%）。不満足と回答した者は無かった。ファシリテーターへの要望についての自由記述では、「ディスカッション様式に意見を言い合う場も欲しい。一人で喋ると緊張するので・・・」との意見と「笑顔で良かったです」との感想が得られた。

3)「臨床看護実践を語る会」のテーマについて

「臨床看護実践を語る会」では、事前に語りのテーマを提示しているが、そのことに対する取り組み状況については、A病院では準備して参加していたが（66.67%）、B病院では、その場で考えたと回答する者が70%であった。「臨床看護実践を語る会」で取り上げたテーマについて、興味があったものを複数回答にしたところ、「最も心に残った看護」や「自分にとって変化したこと」には、A病院、B病院に共通して興味を示していたが、一方で「一皮むけたと感じた経験」については、A病院で1名、B病院では0名と興味は殆ど示されなかった（図4参照）。

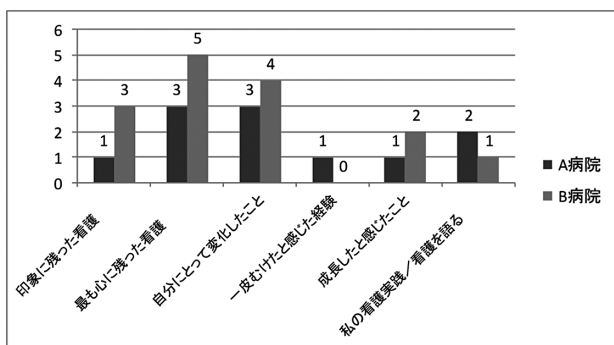


図4 「臨床看護実践を語る会」テーマで興味のあったもの（複数回答）

その他、あると良いと思うテーマの自由記載では、「看護師としてつまづいたこと」との回答があった。

4)「臨床看護実践を語る会」の運営に関する意見

自由記述で「臨床看護実践を語る会」の開催・時間・日程・回数について意見を求めたところ、「開催時間が17時40分くらいだと助かる」や「夜勤や遅出勤に重なってしまい参加できなかったので、開催回数がもう少し多いと参加しやすい」など、勤務時間と開催時間の不都合についての意見があった。また、「年内開催回数は少なくても良いので、4年目以降で行うのも良いかと思う」のような、「臨床看護実践を語る会」の継続を示唆するような意見もあった。

4.「臨床看護実践を語る会」の企画と要望について

1)「臨床看護実践を語る会」の企画の適切性

「臨床看護実践を語る会」は新人看護師から3年目看護師までの3年間継続した企画であったが、おおむね適切であると回答していた（76.92%）。また、さらに続けたいと希望する者もあった（15.38%）。

「臨床看護実践を語る会」を企画するに相応しい時期は、新人看護師の時期はもちろん、中堅看護師（5～10年）においても相応しいとの回答も多かった（53.85%）。同様に熟練看護師の時期においても相応しいとの回答があった（表4参照）。

表4 「臨床看護実践を語る会」を企画開催するに相応しい時期（複数回答）

	新人看護師の時期		中堅看護師の時期（5～10年）		熟練看護師の時期（10年以上）	
A病院	2	66.67%	1	33.33%	1	33.33%
B病院	7	70%	6	60%	2	20%
合計	9	69.23%	7	53.85%	3	23.08%

2) 今後の「臨床看護実践を語る会」への参加意思

「臨床看護実践を語る会」の企画があれば今後も参加したいとの回答が殆どであった（図5参照）。

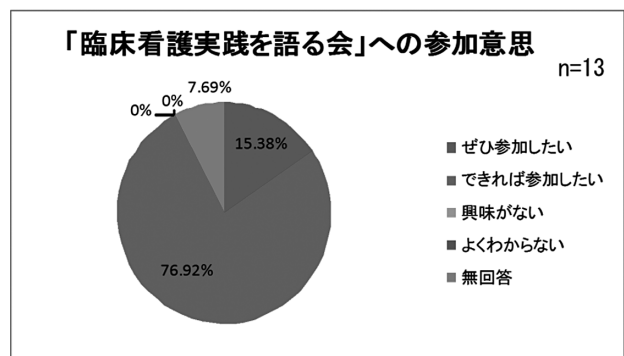


図5 今後の「臨床看護実践を語る会」の参加意思

3)「臨床看護実践を語る会」への要望

参加意思表明をしたが都合により不参加であった対象からの回答も含めた「臨床看護実践を語る会」への要望には、以下の4点が挙げられた。

- ・途中参加でも大丈夫であればもっと参加しやすいかと思う（実際は途中参加可能で実施していた）。
- ・一回目に参加し、とても楽しかったし自分を振り返る貴重な機会だと思い、次も絶対参加したいと思っていたが、勤務が合わずとても残念だった。また、日勤でも仕事が終わっていなければ参加するのが難しいので、開催回数が増えたら、参加できる回数も増えると感じた。時間が合えば、次も参加したい。

・一年目の時も参加していたので、一年目の自分とどう変わったか比べられるといいなと思っている。

・研修の他にこういった会があると、他の看護学校から入職した者は他セクションの同期と関われるチャンスが多くなり、また、他人の考えを知り学ぶことができた。

IV. 考察

1. 「臨床看護実践を語る会」の参加状況

本調査は、新人看護師から3年目看護師までの3年間にわたり開催した「臨床看護実践を語る会」の参加者評価を得ることを目的として実施した。対象とした2施設では、参加者選定および参加継続性の条件には差が生じていた。

A病院では、新人看護師研修会において「臨床看護実践を語る会」の周知をした。そこで語る会および研究参加に同意が得られた4名に対して、継続的に参加を呼びかけ、また看護部との連携協力を得て、業務量が比較的落ち着いている土曜日の勤務時間内で「臨床看護実践を語る会」を実施することができた。そのため、参加者数としては4名と少ないが一定の参加者確保ができ、3年間継続参加が可能な条件も整っていた。実際は勤務上の都合などで不参加のこともあったが、語ることを目的とした参加を積極的に希望していた。

B病院では、新人看護師全体に向け毎回リーフレットで開催通知をして参加者募集を呼びかけた。研究的要素がある「臨床看護実践を語る会」のため、あくまで本人任意の希望によって、毎回の参加者が決定した。看護部と協力し、新人看護師研修プログラムや院内行事を避け、任意参加が可能なように、平日の日勤勤務時間終了後に開催時間を設定した。しかしながら、図2の結果に示されたように、勤務の都合が合わないことや、当日残務があると参加できなくなるなど、参加の確約が困難であった。そのため、年間を通じて新規の参加者募集を行った。人数が集まらずに追加募集も行ったが、継続的な参加者確保が困難な状況であった。その一方で、年度初めに研究参加の意思確認を行うと、時間が合えば参加したいとの関心を示した者は多く、参加希望者は全期間を通して33名であり、3年間の開催期間中に複数回参加が可能であった者も含んでいた。結果として、3年間の開催期間中に1～2回の参加であった者が殆どであった。

そのため、本調査の回答者13名（A病院3名、B病院10名）は、厳密に言えば等質な対象者であるとはいえない。しかし調査結果全体を見ると、両病院ともほぼ同様の回答傾向があり、大きな相違や逸脱例は認められな

かった。おそらくは、B病院の回答者10名は、ほぼ毎回参加できた1名を含み全員が1回以上の参加者であり、意思表明をしたが不参加の者は有効回答者の中には含まれなかったためであろうと考えられる。よって、アンケート調査回収率35.1%と十分な数量的確保に至ってはいないものの、調査目的の参加者評価を得ることに對しては、考察するに耐えうると読み取れる。

2. 「臨床看護実践を語る会」の運営方法の検討

「臨床看護実践を語る会」の運営実施については、開催時期、開催時間、開催回数、インタビュー時間配分などについて、おおむね好評価が得られ、参加者に負担感を与えることなく実施できたと推定される。A病院とB病院では、「臨床看護実践を語る会」開催時間帯に差はあったが、参加者からの評価には差異はみられなかった。しかし、勤務調整が可能であったA病院に比して、B病院では勤務時間終了後の任意参加のため、「業務で行けなかった」「休日だった」との回答が半数ほどを占めていた（図2）。このことから、興味関心のある者が参加できるに十分な日程の検討、開催時間、開催回数、場所の確保の調整、また施設内での実施にあたっては看護部との連携調整が課題となる。また、今回の「臨床看護実践を語る会」には、研究的介入も明記していたため、参加を敬遠する例もあったと予測される。今後、研修プログラムとして実施を検討するならば、誰もが自由に参加できるように調整が必要となるであろう。

一方で、多忙な業務の中でも「臨床看護実践を語る会」に参加したいと動機づけられた理由には、「他病棟の同期と話せる」が最も多かった（表2）。研修以外の場ではなかなか同期の看護師と看護実践について語り合うことがないことがその理由になっていた。また、参加は本人の意思に任されてはいたものの、「上司・先輩に勧められた」という回答も多かった。「研究に興味がある」や「テーマに興味がある」が0名であったことと相まって、初回参加の動機づけの部分については、施設の協力を得ることや開催意義の明示することが重要であると考えられる。新人看護師の場合は自施設での研修プログラムが充実しているため、その他の任意研修に参加する余裕がないのも事実であろう。よほどの興味がないかぎり、時間をやりくりして任意参加するためには周囲からの働きかけを必要とする。近年、ナラティブは人間科学における知に至る有用な手段として、特に看護学では実践の中に埋もれた倫理的な知、魂を揺さぶる審美的な知、個人的な知（暗黙知）を浮き彫りにするアプローチ方法として注目されてきている¹⁾。川島²⁾は、臨床においてナラティブを語る職場文化を形成することが看護の質の向上に通じると述べ、その理由を3つ挙げている。

すなわち、看護のナラティブから得られた教訓を他の看護師も用いることができること、語ることを通じて潜在化されていた問題意識が顕在化し、実践的知識を生み出すと同時に、既存の理論との共通性や差異が明らかとなること、経験を語る文化の中で、経験の未熟な看護師らも、自らの経験を流さず注意深く洞察する習慣や、他人の経験から学ぶ姿勢を身につけられることである。結果から、参加者の中には、参加への興味を刺激されず、上司に勧められた者も含んでいたが、実際に参加した後に得られる満足感、興味の有無に関わらず得られていることが示された。

以上のことから、本研究の取り組みによって、参加者に語ることの意義に触れることができるように周知する必要があったと考える。臨床の現場で語ること自体の経験を活かすことが、その現場の質の向上につながる可能性を示唆することを強調する必要がある。

「臨床看護実践を語る会」のテーマ設定については、おおむね興味を示していたが、テーマが「一皮むけたと感じた」のような抽象的な表現の場合、そういった経験があるという自覚に乏しい場合には、語り出しが困難であった。「変化したこと」や「成長したこと」には一定の興味を得られていることから、意味合いは類似していても、感覚的に認識しにくい表現は控えるべきであった（図4）。また、取り上げたいテーマの提案には「看護師としてつまづいたこと」があった。「印象に残る」や「心に残る」のテーマ開催時では、悩んだり、失敗したり、うまくいかない困難事例なども語られていた。そこで参加者は、自分の体験を語り他者の体験を聴くことで、自分だけが悩みや不安を抱えているのではないということ、事例を共有することで共感を得ていたのだと思われる。奥野ら³⁾は、看護師同士が互いに成長しあえる関係性としての同僚性（collegiality）を形成する「場」として、同じ状況に直面している看護師同士が交流し、経験を活かし、学びあえる「場」を提供すること、こうした共同体を継続的に支援し、組織の中で育成することが可能であると述べている。結果から、「臨床看護実践を語る会」に参加して得られるものに、「他人の考えから学ぶ」「定期的な振り返り」があるように（表3）、特に、新人看護師の時期には、この同僚性を形成する場として「臨床看護実践を語る会」が成立し、互いに励まし、高めあう関係が期待される。そのため、こういった場の提供を研修プログラムとして取り入れていくために、どのような支援のあり方が良いかを検討する必要がある。

今回、「臨床看護実践を語る会」におけるファシリテーションは、その場の流れを妨げることのない進行役であったが、実際には開催日の参加者が1～2名となることもあり、インタビュアーとならざるを得ない場合も

あった。そのため、仲間と語り合うディスカッションというよりも、対話的にならざるを得ず、その部分で緊張感を与えることもあったと思われる。しかし、おおむね満足感を得ることができた（図3）。このことは、所属施設に関係のない者が主催し、会をファシリテートしたことで、肩肘張らずフランクに語ることでできる場を参加者に提供することができた成果であると思われる。今後は、どのような投げかけや促しが自由な語りにつながったのかを分析し、グループダイナミクスを促進するために、どのような方法が必要であるか提案できると良いであろう。

3. 「臨床看護実践を語る会」の企画の有用性と継続性の検討

「臨床看護実践を語る会」に参加した回答者からは、会の企画内容について、「自分を振り返る貴重な機会になる」など、おおむね好評価が得られ、今後も継続して参加したいという意見が得られた（図5）。業務外のプログラムであるため、参加までに足が遠のいてしまうことや、業務調整の困難さにより継続した出席が難しいなどの課題があるが、参加した者にとっては「臨床看護実践を語る会」の価値や意義を見出せていたのだと推察される。Tanner⁴⁾は、看護実践能力を育成するための教育方法として、自分の経験を語ることの重要性を強調しており、とりわけ、「語らい」という相互作用を期待している。自分の経験を語ることによって、その人自身は自己内省につながるが、聞いている看護師は、語る人の臨床状況を想い描くだけでなく、同時に自分の臨床を想い起こして重ね合わせていく作業をする。「臨床看護実践を語る会」というグループで語るスタイルをとることによって、話す人も聞く人も互いに啓発されて、この「語らい」の中で、暗黙知が言語化されていくのである。したがって、看護の知を表現し看護実践能力を育むためにも「臨床看護実践を語る会」は充分に有用性があると言える。

また結果から、中堅看護師や熟練看護師を対象とした「臨床看護実践を語る会」の企画の継続性を望むことも示唆された（表4）。臨床現場においては、在院日数の短縮とそれに伴う入退院数の増加、クリニカルパスの普及、病床機能分化の影響による療養環境の移動が短期間で日常的に行われる等といった高度化高速化の状況にある。中堅および熟練看護師達は、こうした臨床現場の状況対応に加え、新人看護職員の育成やその他の役割など、多重の実務をこなす疲弊している現状がある。こうした状況の中において、看護実践について語り深める機会が激減している。看護職が自身のキャリアを考えるために最も必要なのは、日々の看護実践の積み重ねから目

指す看護、姿を明確にすることであろう。そのために、中堅および熟練看護師を対象とした、「臨床看護実践を語る会」を積極的、継続的に設けていくことが今後益々重要となるであろう。

本調査の限界として、「臨床看護実践を語る会」参加対象者からの十分な回答数が得られたとは言えない。特に参加頻度が少なかった者、参加意思表明をしたが都合により不参加であった者の意見の反映が十分ではないため、参加者意見としてはバイアスが生じている可能性が考えられる。

V. 結論

本調査から、以下の3点が明らかとなった。

- ・本調査における対象者の等質性には違いがあったものの、「臨床看護実践を語る会」に参加した参加者意見としては、明確な差異がなかった。
- ・「臨床看護実践を語る会」の運営実施方法については、おおむね好評価が得られた。しかし業務上の都合で参加ができない場合もあり、自由度を保証しつつ誰もが参加可能な研修プログラムを検討することが必要である。
- ・「臨床看護実践を語る会」の企画内容については、おおむね好評価が得られた。参加によって、気づきや自

己のふり返し、同期の仲間と話すことから共感が得られ満足感に繋がった。今後の課題として、参加者数が確保できるような周知方法と語りのテーマの設定をすること、また参加者を中堅および熟練看護師にも拡大していく必要性が示唆された。

謝辞

本調査にあたり、「臨床看護実践を語る会」に参加して頂いた看護師の皆様ならびに調査に協力を頂いた看護師の皆様に感謝申し上げます。

なお、本調査はJSPS科研費 JP25463308の助成を受けて実施した研究の一部であり、第13回北海道医療大学看護福祉学部学会学術集会にて、ポスター発表しました。

文献

- 1) 野口裕二編：ナラティブ・アプローチ，p.101，勁草書房，2009.
- 2) 川島みどり：看護を語ることの意味―“ナラティブ”に生きて，p.11-12，看護の科学社，2007.
- 3) 奥野信行・長尾匡子・近田敬子：看護師間の協同活動による同僚性の形成に関する研究 ―看護教育セミナーを通して―，Quality Nursing, 10(2), p.16-22, 2004.
- 4) Tanner, C.A.：学習者の個別性に応じた看護教育. 日本看護教育学会誌, 10(3), p.39-49, 2000.

Evaluation of “Nursing Discussion Forum” and Future Issues

Hisako SUGITA • Fusa KARATSU • Kaori NISHIMURA • Sumiko FUKUI

Abstract

Purpose : This study was conducted to evaluate “Nursing Discussion Forum” by the participants. This forum has been held on a continuous basis for last three years. At the time of the first forum was held, all the participants were the first-year nurses. These meetings were part of the research for the “Clarification of the Process whereby Novice Nurses Gain Practical Clinical Wisdom and the Development of Tools for Evaluating Nurses’ Career Formation”.

Method : A self-administered questionnaire was administered to the participants of two hospitals in Hokkaido. The survey data were analyzed statistically and qualitatively for each hospital.

Results : Of 37 participants, 13 participants responded to the questionnaire (response rate of 35.1%). Majority of the participants noted they had decided to participate in this forum to share their experiences with other nurses working in various hospital wards. More than 70% of the respondents reported being satisfied with the outcome of the forum because they had the opportunity to learn from others’ perspectives and ideas in the clinical practice and to reflect on their nursing practice. For about half of the respondents, the reasons for absence from forum were work and other conflicts. The operation of the forum was given a generally favorable evaluation. Many of the respondents stated that the forum would be also helpful for mid-career nurses (i.e., 5 th- to 10th-year nurses) and that they wished to attend the forum in the future, too.

Conclusion : In the future, it is necessary to closely examine topics suitable for forum. The operation and management of the forum should be also considered towards securing participants while allowing them to decide when to join and drop out. The survey suggests the need to include mid-career and expert nurses in discussion forum in the future.

Key words : clinical nursing practice, novice nurses, continuing education